

持続可能な開発目標（SDGs）対応分科会（第1回）議事要旨

日 時：平成29年6月8日（木） 13：00～15：06

場 所：日本学術会議 5－B会議室（5階）

議 題：1）役員の互選について
2）課題の確認について
3）今後の進め方について
4）その他

参加者：井野瀬委員、花木委員、武内委員、沖委員、吾郷委員、蟹江委員（ビデオ会議参加）、鹿野委員

配布資料：

資料1 科学と社会委員会分科会の設置について

資料2 科学と社会委員会持続可能な開発目標(SDGs)対応分科会委員名簿

資料3 花木委員提供資料

3－1 委員会活動とSDGsの関連 集計結果

3－2 22期・23期の提言および報告とSDGs

参考① 提言「いまこそ『包摂する社会』の基盤づくりを」

（平成26年9月8日 社会学委員会・経済学委員会合同包摂的
社会政策に関する多角的検討分科会）

参考② 提言「持続可能な地球社会の実現をめざして—Future Earth（フューチャー・アース）の推進—」

（平成28年4月5日 フューチャー・アースの推進に関する委員会）

参考③ 提言「環境教育の統合的推進に向けて」

（平成28年11月16日 環境学委員会環境思想・環境教育分科会）

参考④ 提言「日本型の産業化支援戦略」

（平成29年4月3日 地域研究委員会国際地域開発研究分科会）

資料4 吾郷委員提供資料

「国際社会の機能主義的結合」『法律時報』2013年10月（85巻11号）

資料5 「未来への提言 科学技術イノベーションの『橋を架ける力』でグローバル課題の解決を SDGs実施に向けた科学技術外交の4つのアクション」（平成29年5月12日 科学技術外交推進会議）

資料6 A Guide to SDG Interactions: from Science to Implementation
(INTERNATIONAL COUNCIL FOR SCIENCE)

概 要：

1) 役員の互選について

井野瀬委員が委員長に、花木委員が副委員長に、沖委員及び蟹江委員が幹事に、それぞれ選出された。

2) 課題の確認について

資料1に基づき本分科会の設置目的が確認された後、資料3及び資料4に基づき、花木委員・吾郷委員から説明があり、それらをもとに意見交換がなされた。委員から出された意見は以下の通り。

- ・研究者としてSDGsを意識してやっていく、という意識を持たせることが日本学術会議の重要な課題になってくると思う。SDGsが視野に入っていない、見えていないということが議論する際の重要な点の一つになる。
- ・科学と社会委員会に本分科会を設置したことは、日本学術会議におけるSDGsの主流化の動きだと考えている。SDGsを使って日本学術会議がどう体質を改善していくのか、学問がどう流れを変えられるのか、が重要な点だと思う。
- ・若手研究者の中でSDGsについて聞く機会はなかなかない。しかし、学術界が今後どう変容していくかを考えた時には、若手研究者こそSDGsについて真剣にならなければならない。
- ・SDGsの17の目標との関係を考えるとき、全ての目標にプラス、というわけではなく、ある目標にはプラスだが、別の目標にはマイナスとなる、ということもある。それを認識することで、よりサステイナブルな方向に議論を持っていく・軌道修正するということが必要なのではないか。
- ・SDGsは社会が目指すべきものであり、社会の構成員として敏感に反応しているところもある一方、そうでないところもある。そういった感度の違いが資料3に表れている。今後3,4年経てばもう少し浸透するかもしれない、ということを見ると、学術界がそこにどう貢献していくのか、という観点から議論を行うということにつながっていくのではないか。
- ・分野や個人におけるSDGsについての感度の差の原因は、「知っている・知らない」「関連する程度の強弱」など色々あると思うが、「知らないこと」「関係ないと思っていること」がやはり大きいと思う。外からの刺激がないとなかなか進まないのではないかと思うので、それをこの分科会が言語化して見えやすくできればいいのではないか。
- ・資料3のような分析・議論はこれまでなかったので、こういう議論をした、こういう分析をした、ということを出すことだけでも意味があると思う。
- ・「知らない」という現状に対して、どう知らしめていくのかを考えなければならない。SDGsは環境学だけのことではない、と認識してもらうことが必要で

ある。17 項目ある中で、合致するものが多い方がいい、というわけではなく、項目の中で「本業でできるものは何か」を探すことが必要である。

- ・資料 3－2 は申請ベースではなく、こちら側が考えて「SDGs とどういった関連があるか」というものなので、細かくフィードバックすれば、各委員会等にとっても気づきになり、意識を変えることにつながるのではないかと。資料 3－1 についても、回答なしということについてもこういう議論があったのだがどうだろうか、とフィードバックすることで意識を持たせることもできるのではないかと。
- ・上からルールを押し付けられてやるのではなく、自発性がないと、抵抗が強いと思う。一緒にルールを作っていく、というマインドチェンジができるかどうか重要なことだと思う。
- ・教えられるというより気づきを得ることの方がいいのでは、ということであれば、別の会議で、企業での活動でよいと思われるものをまとめた資料があったが、その日本学術会議版を作るのもありだと思う。
- ・日本学術会議が SDGs を使って体質改善をしていく、という議論にするためにはどうすればいいのか。何を 24 期につなげていけばいいのか、言いつばなしではなく 24 期の動きをウォッチしていく仕組みも必要だと思う。
- ・日本の展望の検証として、SDGs というものを含めて考え直すということは具体的な方法だと思う。
- ・色々な機会に、SDGs がどう使えるのか、を見せること、色々な分野の人を巻き込んでいくことが必要である。

3) 今後の進め方について

9 月末までの任期中にあと 1 回、できればあと 2 回開催したい。本日のように素材となるものがないと議論を膨らませていけないため、次回も委員から議論の素材となるものを出してもらい、検討をしながら次期に向けての引継ぎ内容を考えていきたい。

次回は環境学委員会でとりまとめ中の報告について、武内委員に話題提供してもらう。

4) その他

次回は 6 月 29 日（木）16：30 から開催することとなった。